

翻刻『源氏物語古註』（三十六）——かしは木——

（山口県文書館蔵 右田毛利家伝来細川幽齋自筆本）

熊 本 守 雄

凡 例

一、本稿は、山口県文書館蔵の右田毛利家伝来、細川幽齋自筆『源氏物語古註』（仮称。あるいは『源氏物語抄』と称すべきか。天理図書館ならびに京都大学に分蔵されている菊亭家旧蔵本では『源氏物語抄』とある。細川幽齋が慶長五年当時に住せし丹後田辺城を石田三成に攻囲せられた際に、智仁親王の許に献呈しようとした書の中に見えている『源氏物語抄』が、この右田毛利家伝来本であるかもしれない）の「かしは木」一帖を翻刻したものである。

二、「かしは木」二帖は、三括より成る。即ち、料紙を何枚か重ねて二つ折にした括りが、全部で三括りある。

第一括 料紙六枚十二葉（その内、端一丁は前表紙の見返しとして使われており、墨付は十一丁）

第二括 料紙七枚十四葉

第三括 料紙三枚六葉（その内、端一丁は後表紙の見返しとして使われており、その見返しの部分にも墨付しており、墨付は六

丁、十一面

料紙三十二葉の内、墨付は三十一丁、六十一面に及んでいる。

三、「かしは木」一帖の翻字にあたっては、できるだけ原本に添いながらも、次の諸点において、一部手を加えた。

1 注釈の項目（見出しの本文）即ち、源氏物語の本文には、読解の便を考えて、「」を付し、示した。

2 原本にはないが、読みやすくすることを目的として、注釈の本文に、仮に、句読点を施し、又、私意により、濁点表記を加えた。

3 原本の本文丁数（墨付丁数）を示すため、各面の終わりに、（一ウ）などの記号をつけた。

4 原本では、注釈の本文の各項毎に（その冒頭に）、「一、」を記して、注釈を加えることを普通とするが、まま、改行して項目を立てながらも、「一、」のない場合がある。そうした項目の場合には、（一）と、かっこを付して示した。

5 現行の活字の範囲内で、可能な限り、原本の字体を再現する努力はしたが、異体文字・変体仮名は現行の活字の字体に改めた。仮名遣いや送り仮名は原本の通りである。

6 本書に疑問のある箇所及びミスプリントと誤認されやすい箇所等には、(マ)と記した。

○ 資料の翻刻を許可していただいた山口県文書館に感謝申し上げます。

「かしは木」、うたをもて、まきの名とす。源氏四十八歳の春より秋まで。

(一)、「ゑもんのかんのきミ」とハ、かしは木、なやミわたり給ふの事、をこたらで、としあらたまりたる也。「おとゞ、きたのかた」とハ、内府の夫婦つまのなげきを、かしは木見奉り給ふに、しるてかけはなれんいのちかひなく、つミもおもかるべきことをおもふ心ハ心として、あながちにおしミとゞめまほしき身かハ、とおもひみだれ給ふ也。いはけなかりしほどより、なに事をも、人にハいまひときハまさらんと、おほやけわたくしのことふれて、なのめならず思ひのぼりにしかど、その心かなひがたかりし、ひとつふたつのふしごとに、身を思ひおとして、やまひつきたると也。「ひとつ」ハ、女の宮の御こと也。いまひとつハ、なにともしれず。

一、「のちのよのをこなひに」とハ、女三の宮にあやまちしたるのち、よをそむかんと思ひつれど、おやたちの御うらみを思ひて、野山にへいあくがれんみちのほだしなるべくおぼえて、とかくにまぎらハしつゝ、すぐして、つゐによにたちまふべくもなき物思ひつきたると也。

(一)、「ひとかたならぬ」とハ、女三の宮の恋こひしきにそへて、源氏をおそろしくはづかしく見奉りて、かくおもきやまひとなりたる也。一、「われよりほかに」とハ、わが心からしたるつミとがなれば、うらむべき人なきと也。ほとけかミもかこたんかたなきと也。「かこた

ん」、うらミンかたなきと也。これみなかうあるべき縁にてこそあらめと也。

一、「たれも千とせの」、引哥、うくもよに心に物のかなハぬハたれもちとせのまつならなくに。たれもつるにいきとまるよにてもなしとおもへば、人にすこしもしのばるべきほどにて、なくなるハ、中くによるしきと、かしは木思ひとり給ふ也。

一、「なげのあハれをも」とハ、なげやりばかりに、「あハれかけ給はん人いあらん」とハ、女三の宮のあハれとおぼさば、ひとつ思ひにもゆるなぐさつさめにすべけれの心也。引哥、なつむしの身をいたづらになすことハひとつおもひによりてなりけり。

一、「われも人も」とハ、女三の宮もわれも、うき名もれてやすからぬなげきせんよりハ、なくなりなば、源氏の名めしと心をき給ふ事もすこしおぼしゆるしもやせんと柏木思ひ給ふ也。「なめし」ハ、無礼也。

一、「いまハのとぢめ」とハ、よろづの事なくなるきハには、人もおもひけつならひなると也。「とぢめ」ハ、きハ也。

一、「又ことぎまの」とハ、別に源氏にうらみられ奉るべきあやまちなきと、柏木おぼさるゝ也。別の字、ことにとよむ。長恨哥傳にあり。

一、「としごろの」とハ、物のおりふしごとに、源氏のまつハしならしたまひあハれもなくなりたらバ、おぼしめしいでもすべきと柏木心也。②

一、「などかくほどもなく」とは、いのちほどもなくなりたるぞと、なみだにかきくれて、かしハ木思ひみだれて、枕まくらうきぬばかりなる也。

引哥、
一、「ひとりねの」とこにたまれるなミだにハいしのまくらもうきぬべらなり。

一、「人やりならず」、引哥、人やりのみちならなくに大かたハいさうしといひていざかへりなん。「いさゝかひまあり」とハ、心ちすこしよきひまある也。

一、「かしこに」とハ、女三の宮に文たてまつり給ふ也。「いまハかぎり」文言也。

一、「いまハいのちかぎりになりたるさまハ、をのづから女三の宮きゝもし給ふらんを、御みゝとゞめ給ハぬもことハリなれど、とかしハ木かきさしたる也。

一、「いまつゝ今とてもえんけぶりもむすぼゝれたえぬおもひのなをやのころん」なきあとのけぶりも、むすぼゝれて、おもひハ女三の宮のかたになをものこるべきと、かしは木よめる也。あハれだにの給ハゞ、のちのよのやミにまどハんひかりにもせんとかける也。小侍従こじじゆうにも、いひをこせ給ふ也。へつゝ

一、「ミづからも」とハ、いま一たびいふべき事あり、小侍従ミづからおハせよと也。

一、「この人も」とハ、小侍従も、わらハより、はゞのたよりにかしハ木がたに、ゆきかよひ、なれゝしかりつれば、かしハぎのおほけなく女三の宮に心かけ給たるこそうたておもへど、いまハかぎりときくハかなしくて、此御かへり、これをとぢめにてこそ侍らめとて、女三の宮にしみてかゝせ奉る也。

一、「われも」とハ、女三の宮も、くわいにんなれば、けふかあすか、いのちかぎりならんとおぼせば、かしハ木に一よのちぎりもあハれとばかりハ思ひしられ給へど、いと心うき事と思ひこりたるとの給て、かき給ハぬ也。「御本上のづしやかなるにハあらぬ」とハ、むまれつきじめやかにハ女三のミやおハしまさぬなれど、源氏のけしきのまほならねど、おりゝうらみあらハし給ふが、をそろしきにかきかぬ給ふ也。されど、小侍従が御すゞりとりまかなひせめて、

かゝせ奉れば、しぶゝにかき給ふをとりて、かしハ木がたへまいる也。へつゝ

一、「おとゞは」とハ、内府ハ、かつらぎ山よりをこなひ人さうじいでたるに、あひ給て、かぢまいらせんとし給ふ也。げんぎなどの、よにもきこえぬなどをも、かしハ木のおとうとのきんだちつかハして、たづねめす也。「け、にくゝ」とハ、けしきにくき山ぶしども、おほくまいる也。

一、「わづらひ給ふさま」とハ、かしは木のやまひのさま、女のりやうとげんぎども申す也。「さることや」と内府おぼせど、物のけのあらハるゝ事もなき也。内府おぼしわづらひて、かゝる山のくまゝまでもをこなひ人たづねめしいでたる也。「くまゝ」ハ、かげくまで也。「此ひじりも」とハ、かつらぎ山よりまいりたる山ぶし也。「まぶしつべたましく」とハ、目節太神とかけ、日本記めのふしくらありてをそろしきかたち也。「だらに」とは、きやうよむ也。

一、あなにくや。つみふかき身にやあらん、だらにのこゑたかきハ、けをそろしへつゝくゝて、しぬべくこそと、かしハ木の給ふ也。敦忠あつちゆう大將だいじやうのやまひし給し時、薬師經やくしきやうをよむに、宮毘羅大將くうびらだいじやうとよミたるを、大將だいじやうのくびくゝれといふとき、給て、しにいり給しといふ心也。かしハ木も、だらにのこゑをそろしとの給ふ也。

一、「おとゞハさもしり給ハで」とハ、内府ハ小侍従とかたらひ給ふハしり給ハぬ也。

一、「うちやすミたり」とは、かしは木、内府にの給ふ也。

一、「此ひじりと」とハ、かつらぎ山よりまいりたる山ぶしと、内府ハ物がたりし給也。

一、「花やかに」とハ、内府物わらひし給ふ人の、かゝるいやしき山ぶしどもとむかひる給て、此わづらひ給ふさま、うちたゆミつゝ、おもりにけるを、物のけあらハるべく、ねんじ給へと、此山ぶしにの

給ふも、あはれなると也。「ねんじ」ハ、きねんし給へ也。「なにのつミとも」ハ、内府わがわづらうをなにのつミともしり給ハぬに、げんざハ女のりやうとうらなひいだしたる也。まことに女三の宮の御しうしんの身にそひたるならバ、うき身もひきかへしやんごとゝなくなるべきと、かしは木侍従にかたり給ふ也。「さるまじきあやまち」とは、女三の宮おかし奉りて、かの御ためにもわが身もかくなりはつるとの給ふ也。

一、「むかしのよにもなくやハある」とハ、なりひら、二条のきさきおかしたてまつれたためしなどを、心にこめて思ひなをすにも、けハひわづらハしく、源氏の御心に、此とがをしられ奉りて、よにながらへん事もいとまばゆくおほゆるハ、げにことなる源氏の御ひかりと、かしハ木おほさるゝ也。「見あハせ」とは、かのしがくの日さかづきし給しに、めミあハせ給し夕より、まどひそめし、「玉しゐの身にもかへらぬ」ハ、引哥、こひわびてよひくいづる玉しゐハ中く身にもかへらざりけり。六条院のうちあくがれありかバ、むすびとゞめ給へと小侍従にいひて、かしハ木なき給へる也。「むすびとゞめ」、引哥、玉ハミつぬしハたれとハしらねどもむすびとゞめよしたがひのつま。

一、「宮も」とハ、女三の宮も、物をはづかしう、つゝましとおぼしたるさま⁴かたる也。さてうちなやミ給へらんさまの、見奉る心ちして思ひやられ給へば、げにあくがるゝ玉しゐやゆきかよふらんと、かしハ木おほさるゝ也。

一、「此御事」とハ、女三の宮の御事、かけていハじと、ながきのちのよのほだしにさへならんと、かしハ木の給ふ也。「心ぐるしき御事」とハ、女三の宮の御産をたいらかにきゝ奉りてしがなと也。「みしゆめを」とハ、ねこを女三の宮に奉らんとみ給ひたるゆめ也。又かた人なく、いミじういぶせくおほすと也。

一、「かつハをそろしう」とハ、侍従も人めをそろしとおもふ也。あハれハしのばれず、うちなく也。かしハ木ハ、しそくさして御かへりミ給ふ也。

一、「心ぐるしうきゝながら」とハ、かしは木のありさまきゝながら、いかでかは。をしのこさんとかゝせ給へる也。心にのこさずをしはかりたると也。

一、「たちそひてきえやしなましうきことを思ひみだるゝけぶりくらべに」、かしは木のけぶりにそひてきえぬべし、うきことを思ひくらべと也。⁵われもをくるべうもおほえぬと也。「このけぶりくらべばかり」とハ、われにたちそハんと給ふけぶりくらべばかりうれしく此よの思ひいでならめとかしは木の給ふ也。「御かへり、ふしながら」とハ、女三の宮、御かへり、かしは木かき給へる也。「あやしきとりのあとのやうに」とハ、文字ハ蒼頡といへる人、鳥の跡を⁶観じてつくれる也。

一、「ゆくゑなき空のけぶりとなりぬとも思ふあたりをたちハはなれじ」、けぶりとなりても、女三の宮のあたりはなれじと也。夕ハわきてながめ給へ。ゆふべのけぶりにならんの心也。「とがめ聞えさせ給はん」とハ、なくなりてのちハ、源氏の御とがめもふかゝらじの心也。かひなきあハれをだにかけ給へと、文にかけける也。よし、ふけぬさきに、かへり給へと、侍従かへし給ふ也。かぎりのさま、女三の宮にかたり給へと也。

一、「かゝることしも」とハ、女三の宮の御こと、いかなるむかしのちぎり⁷にて、身をうしなふほどに心にしミけん⁸と也。

一、「れいハむごむかへすへ」とハ、無期に也。はつる期もなく、よびすへて、かたらひ給ふを、はやくかへれとの給ふもあはれなると、侍従おもへる也。「すゝろごと」とハ、あぢきなきこと也。無期ハ、はてなくといへる心也。「えもいでやらす」、侍従もいでやらす、か

しは木のめのともいひて、なきまどふ也。「おとゞなど」ハ、内府のおほしたるけしき、かなしきと也。

一、「なにか。なをいきとまり侍るまじきとて、かしハ木なき給ふ也。

一、「宮ハ」とは、女三の宮は、此くれより産し給ふべきさまになやミ給ふ也。「おとゞにも」とハ、源氏につげ奉りたる也。をどろきてわたり給へる也。

一、御心のうちハ、かしハ木の子かと思ひまざるかたなくて、わが御子とおもハゞ、いかばかりうれしからましとおぼせど、人めにけしきもらさず、びんぎなどめして、いのらせ給へる也。

一、「おとゞときとぎとぎと給て」とハ、源氏、女三の宮うミ給たるハおとゞときとぎとぎと給て、しのび給たる事の、いちしるくかしは木のかほに、てさしいで給へらんこそ心ぐるしかるべけれとおぼす。女こそあまた人の見ぬ物なれば、心やすきけれ、とおぼす。「又かくうたがひまじるにてハ、心やすきかた」とハ、おとゞときとぎにてもよし、をんなぎミならば、又は宮の心をうけつぎて、密懐心やあやかり給ハんとおぼす也。「わがよとゞにをそろしと思ひしことのむくひ」とハ、ふぢつばをかしたてまつりしむくひなると、おほしあハする也。思ひかけぬことにて、かくむかハリぬれば、のちのよのつミハ、かろミやせましとおぼす也。

一、「心ことなる御はらに」とハ、内親王ばらなれば、心ことにぞ源氏おぼすらんと人々思ひいとミ、うぶやしなひのぎしきいかめしきと也。

一、「御かたぐ」とは、源氏の北方より、さまぐにうぶやしなひし給へる也。

一、よのつねのつるがさね、たかきおまへま盤也。

一、五日のよ、「中宮」ハ、あきこのむ中宮也。「子もちのおまへ」、女三の宮のおまへの物ども、「女房の中にも」とハ、その人々の「しな

ぐ」とは、くらゐをわけてし給ふ也。「御かゆ、とんじき五十具」「とんじき」ハ、下らうに給ハる飯也。「五十具」とハ、ひつ五十にいたる、「院のしもべ」とハ、六条院のしもつかへ也。「ちやうのめしつぎ所」とは、六条院の官人ども也。「なにかのくままで」とは、かげかくれまでめしいだす心也。「宮づかさ」とハ、中宮の大夫人よりはじめて、宮人冷泉院の殿上人、みなまいりて、とりをこなへる也。

一、七日のよハ、きんちうより、うぶやしなひおほやまなると也。

一、「ちじのおとゞ」とは、内府こそ心ことにうぶやしなひつかうまつり給ふべけれども、かしハ木のなやみに何事もおほしわかで、おほぞうの御とぶらひのミぞありける也。「おほう」ハ、大惣也。いそがしきさま也。

一、「宮たち、上達部あまた」とハ、うちよりのうぶやしなひに、親王公卿あまたまいり給へる也。

一、「おとゞの御心のうち」とハ、源氏の御心に、おぼす事ありて、もてはやし給ハぬ也。「宮は」とハ、女三のミやハ、ひハづにおハします身に、むくつけきことし給へれば、御ゆをだにきこしめさず、身の心うき事を、おぼせば、此つるでにしなばや、とのミぞおほしける。

一、「おとゞは」とハ、源氏ハ、人めをかざりおぼせど、まだむつかしげにおハするほどを、とりわきても見奉り給ハぬなりけり。

一、「おひしらへる」とハ、としおひたる女房たちなどは、源氏のをろかにおハしましける、めづらしくおハします、わかぎミをと、うつくしきこゆるを、女三の宮かたみにきと給て、さのミこそハ、おほしへだつる事もまさらめと、わが身つらくて、あまになりなばやの御心つきて、おほしなげき給ふ也。「よるなども」とハ、源氏よるも、女三のミやの御かたにハおほとのごもり給はず。ひる

つかたさしのぞき給ふて、ゆくすゑみじかう物心ほそうて、かゝるほどのらうがハしき心ちするによりて、まいらぬを、いかゞ、御心ちハ、さハやかにおぼさるゝか、とて御木丁のそばよりさしのぞき給へり。女三の宮ミぐしもたげ給て、えいきたるまじきこゝちし侍るを、かゝる人ハつミふかきなり。あまになりて、もしそれにやいきとまると心ミ、又なくなるとも、つミをうしなふこともや、とつねの御けハひよりハおとなびての給ふを、いとうたて、ゆゝしき事なり。などてかさほどハおぼす。産する事ハ、をそろしきことなれど、いのちながらへぬわざならばこそさやうにおぼさめ、あるまじき事との給ふ也。源氏の御心のうちにハ、まことにさもおほしよりの給ハゞ、あまになし奉りてミンハ、あハれなりなんとおぼす。

「かつ見つゝも」とハ、かくミたてゑままつりても、ことにふれて心をかれ給ハんが、われながらも思ひなをすまじく、うき事のまじるべきを、おろかに人のみとがむる事もあらんが、いとをしよう、朱雀院などのきこしめさんことも、わがをこたりにこそならめ、御なやミにことつけて、あまになし奉りてやミン、などおぼしよれど、又かばかりおひさきとをき御ぐしを、やつしてんことも心ぐるしとおぼして、なをつよくおぼしなれ。けしうハおハせじ。かぎりとおぼして、紫の上だに、たいらかになり給たれば、さすがにたのミあるなどゝ、源氏きこえ給て、御ゆなどまいり給ふ。

一、あをミやせ給へるさま、うつくしうはかなげにて、ふし給へる、うつくしげなれば、いミじきあやまちありとも、ミゆるしつべきさまかな、と源氏おぼす也。

一、「山のみかどは」とハ、朱雀院ハ、女三の宮の御産たいらかにハしゝながら、なをなやミ給へるよしのミあれば、御をこなひもみだれておぼしめしけり。女三の宮ハ、よハれる御心ちに、物をきこしめさで日ごろへ給へば、たのもしげなくなり給て、朱雀院をいと戀

しくおぼえ給ふを、又見奉らずなりぬるにやと、なき、かくの給ふさまを、さるべき人してそうし給ひければ、朱雀院、たへがたくおぼしめれて、あるまじき事とおぼしながら、よにかくれていできせ給へり。

一、さる御せうそこもなく、朱雀院、にわかにおハしましたれば、源氏ハをどろきかしまり給ふ。

一、よの中かへりミすまじく思ひつれど、まどひさめがたき物ハ、「子の道のやミになん」、引哥、人のおやの心ハやミにあらねども子をおもふミちにまどひけるかな、と、をこなひもけだいてなん、「をくれさきだつミちの」、引哥、すゑの露もとのしづくやよの中のをくれさきゑだつたためしなるらん。だうりのまゝならで女三の宮やさきだち給はん、さもあらば、そのうらみやかたミにのころんと、このよのそしりをもしらで、物しつるとの給ひて、なき給ふ。「みかたちことにて」とハ、朱雀院御出家にて、なまめかしうおハします、うるハしきほうぶくならず、すミぞめの御すがた、あらまほしうおハしますも、源氏うらやましく見奉り給へる也。「うるハしき」ハ、まことにといふことば也。れいのまづげんじなだおとし給ふ也。わづらひ給ふさま、ことなる御なやミにもおハします。月ごろよハリ給へる御心ちに、物などまいらぬつもりゆへにこそなど、源氏の給ふ也。かたハラいたきおまし所なれどもとて、ミ木丁のまへに、しとねまいりていれ奉り給ふ。女三の宮もとかうつくるひて、ゆかのしもにおろし給ふ也。

一、み木丁すこしをしやらせ給て、よるのそのの心ちすれど、まだげんゝつづくばかりのをこなひにもあらねば、かたハラいたけれどともと、朱雀院の給ふ也。「げんつく」とハ、げんぎほどのをこなひならぬと也。たゞおぼつかなくおぼえ給ふらんと思ひやりてわたらせ給たるとの給ふ也。「さながらみたまふべき」とハ、なやミ給ふまゝ

のさま、さながらミたてまつらんと給ふ也。

一、「宮も」とハ、女三の宮も、なき給て、いくべうも侍らぬを、おハしましたるつるでにあまになし給へよとの給ふ。

一、さる御ほいあらば、たうとき事なるを、さすがにかぎらぬいのちのほどにて、かへりてことのみだれあり、よの人にそしらるゝやうありぬべき事になんををはゞかるべき事などの給ふ也。「おとゞのきミに」とは、源氏に、かくの給ふを、いまハかぎりのさまならば、「そのたすけあるべきをとなんおもふ」とハ、あまになり給たらば、それにいのちのび給ふ事もやとおもふと、朱雀院の給ふ也。^{10オ}

一、日ごろもかくの給へど、ぎけなどの、人の心をたぶらかしてかゝる事をすゝむるやうも侍なるをとてきゝいれ侍らぬと、源氏の給ふ也。

一、物のけのをしへにても、それにまけぬるとて、あしかるべくハこそあらめ、物のけにまけて、あまになしてやよからんと、朱雀院の給ふ也。よハリたる人の、かぎりにての給はん事をきゝいれざらんハ、のちのくるもやあらんとの給ふ也。朱雀院の御心のうちにハ、うしろやすくゆづりをきし御ことを、源氏うけとり給て、心ざしふかゝらず、わがおもふやうにハあらぬ源氏の御けしきを、としごろもきこしめしおぼしつめける事、いろにいでゝうらみ給ふべきにもあらねば、よの人のおもひいふらん所も、くちをしようおぼしわたるに、かゝるおりにもてはなれ、あまになり給はんハ、人わらハへによをうらみたるけしきならで、いのちあやうきなことづけて、さもやなさんとおぼす也。^{10ツ}

一、「大かたのうしろミにハ、たのまれぬべき御をきてなるを、たゞあけをき奉りししるしにハ思ひて、にくげにそむくさまにハあらずとも、御そうぶんにひろくおもしろき宮給ハリ給へるを、つくるハせて、女三の宮すませ奉らん、わがおハしますよに、さるかたにて

も、うしろめたからずきこえをかん、朱雀院おぼす也。「又かのおとゞも」とは、源氏も、さいふとも、をろかにハおもひはなち給ハじと、その心ばへをもミはてんとおぼしとりて、かく物したるつるでに、いむ事うけ給はんをだに、けちゑんにせんかしの給ハする也。

一、「おとゞの君」とハ、源氏、うしとおぼすかたもわすれて、こハいかなるべき事ぞと、くちをしければ、えたへ給はず、うちにいり給て、などか、いくばくも侍るまじき身をすてゝハ、かうおぼしなりにける、しゝまばし心をしづめて、御ゆなどまいれ。たうとき事なりとも、御身よハうてハをこなひもし給てんや。かつつくるひ給てこそと聞え給へど、かしらをふりて、つらくの給ふとおぼしたり。

一、つれなくて、つらしとうらめしと、女三の宮おぼす事もありけるにやと、源氏見奉り給に、いとをしようあハれなり。「とかくきこえかへし、おぼしやすらう」とハ、女三の宮ハ、あまにならんとの給ひ、源氏ハあまになし奉らん事ハほいならんとの給ふほどに、よもあけがたになりぬ。

一、朱雀院ハ、かへりいらんみちもひるハはしたなからんとの給て、御いのりにさぶらう中にやんごとなきかぎりのそうめしいれて、ミぐしおろさせ給ふ。いとさかりなるミぐしをそぎすてゝ、いむことうけ給ふさほうに、源氏ハ、えしのびあへ給はず、なき給ふ。朱雀院はたもとより、とりわきてやんごとなう、人よりすぐれてみ奉らんとおぼし¹¹しを、此よにてハ、かひなきやうになしたてまつるも、あかずかなしと、うちしほたれ給へる也。かくてもたいらかにねんずをもおなじ心につとめ給へかしといひをきて、いそぎかへらせ給ふ也。

一、「宮ハ、なをよハげに」とハ、女三の宮ハ、きえいるやうにて、はかゞしうも朱雀院を見たてまつらせ給ハぬを、かなしとおぼす也。

一、「おとゞも、ゆめのやうに」とハ、源氏も、思ひみだれ給て、むかしおぼえたるミゆきのかしこまりをも、え御らんぜられぬらうがハしを、ことさらにまいりてこそとて、御をくり人にまいらせ給へる也。「らうがハしき」ハ、みだりがハしき也。らんがハしき也。

一、「よの中のけふかあすか」引、今日不知死、明日不知死、何故造作、安穩無常身。雪山にすむ鳥、かくのごとくなくといへり。めんどりハ、夜明造栖となくといへり。〔12〕

一、「又しる人もなくて」とハ、女三の宮、又したしき御ゆかりなくて、たゞよひ給はん、あはれさに、源氏のほいにハおぼされど、おぼしながら、としごろハあづけをきて心やすかりしを、もしいきとまり給ハゞ、あまにてハ、人しげきすまひつきなかるべきを、山ざとにかけはなれ給はんも、心ぼそからんを、さまにしたがひて、おぼしはなたず、はゞみ給へなど、朱雀院の給ふ也。

一、さらにかくまでおほせらるゝに、かへりてはづかしうこそ心ちみだれて、なにごとめえわきまへ侍らずとて、たへがたく源氏おぼしまどひたる也。ごやのかちに、御物のけあらハれて、かうぞあるよいとかしこうとりかへしつ、ひとりをおぼしたりしが、ねたかりしかバ、此わたりさりげなくて日ごろさぶらひつる。いまハかへりなとて、うちわらふ。いとあさまし、これもミやす所の、むらさきうへをば〔12〕とり給ハぬくちをしさに、女三の宮あまになしたるがうれしきとうちわらひ給たる也。此物のけの、こゝにもはなれぬ、とおぼすに、くちをしく源氏くやしくおぼさるゝ事かぎりなし。女三の宮ハ、すこしいきいで給ふやう也。さぶらう人々も、いふかひなくおぼゆ。ミずほう又ものべて、をこなハせ給ふ也。「のべて」とハ、法を修行する事也。

一、「かのゑもんのかミハ」とは、かしハ木ハ、女三の宮あまになり給へるとき、給ふに、きえいるやうにて、たのミがたくなりたる也。

「女ミヤの」とハ、一条のおちのミヤ、あはれに思て、こゝに女二宮わたり給はん事ハ、かるくしかるべし。「うへもおとゞも」とハ、内府の夫婦おハしませば、をのづから女二のミヤみたてまつりやせましと、かしハ木おぼして、一条の宮に、とかくしてまうでんとの給ふを、内府ゆるし給ハねば、たれにもおちばのミヤの御事を、きこえつけ給ふ也。「はゞミやす所」とは、おちばのミヤの御はゞミやす所ハ、はじ〔13〕より女二の宮かしハ木にゆるし給はん事、長く心ゆかずおぼしたりしを、内府のゐたちきこえ給て、心ふかりしにまけ給て、朱雀院もいかゞせんとおぼしめしゆるしけるを、女三のミヤの御ことを、おぼしめしみだれけるつみでも、中く女二の宮ハ、ゆくさきうしろやすきうしろミまうけ給へりと、の給ハすとかしハ木きゝて、かたじけなくおもひいで給ふに、かくて見すて奉りぬることゝおもふにつけて、さまぐいとをしけれど、心にかなハぬいのちなれば、たへぬちぎりうらめしと、かしハ木おぼす也。

一、「おぼしなげかれん」とハ、女二の宮におもひなげかれ奉らんが心ぐるしきを、御心ざしありて、とぶらひたてまつり給へと、かしハ木はゞうへに申給ふ也。

一、いで、あなゆゝし。をくれ奉りてハ、いくほどよにあるべき身とてか、かうまでかしハ木ゆくさきの事をばの給ふぞとて、なき給へば、かしハ木え物もいひやり給ハで、右大弁のきみにぞ大かたの事どもいひつけ給へる也。〔13〕「右大弁」ハ、かしハ木御おとうと也。かしハ木心ばへのどかによくおハしつるきミなれば、内府のきんだち、またすゑぐのわかきハ、おやとたのミ給へるに、かく心ぼそき事をかしハ木の給ひをくを、かなしとおもハぬ人なく、とのゝうちの人々なげく也。

一、「おほやけも」とハ、今上も、おしミくちをしがらせ給て、かぎり

のさまきこしめして、にわかにかしハ木を権大納言になさせ給へる也。よろこびに思ひおこして、いま一たび参内さんないもやとあるとおぼしの給ハせけれど、さらにえためらひ給ハで、くるしき中にも、かしこまり申給ふ也。「ためらひ」とハ、心ちたすけがたきと也。扶行ふぎやうと書也。「おとゞも」とハ、内府も、かくおもきおぼえを見給ふにつけても、かなしう、あたらしき人をとおぼしまどふ事、かぎりなし。

一、「大将の君」とハ、夕ぎりは、つねにふかう思ひなげき、とぶらひ給ふ。よろこびにもまづまうで給へり。かしハ木のおハするたいのかたのみかどハ、馬車うまぐるまたちはまここみて、人さハがしうさハぎみちたり。かしハ木、ことしとなりてハ、おきあがりなども長ながくし給ハねば、夕ぎりのおもくしき御さまにて、おハしたるにみだれながらハえたいめんし給ハで、よハリぬることくちをしければ、なをこなたへいらせ給へ。らうがハしきつミハ、おぼしゆるされなんとて、かしハ木ふし給へるまくらがミのかたに、かぢのそうなどいだして、夕ぎりいれたてまつり給ふ。夕ぎり、はやうより、いさゝかへだつることなく、むつびかハし給ふ御中みちゆうなれば、わかれんことのかなしき、恋しかるべき事も、おやはらかになほおとらず、なげき給へる也。けふハよるこびとて、心ちよげならましをとおもふに、くちおしうて、などかくたのもしげなくハなり給にける。けふハ官位くわんゐあがり給たるよろこびに、いさゝかすくやかにもやとこそおもひ侍りつれとて、木丁のつまみきあげ給へば、くちをしう、その人ともあらずなりにて侍るやとて、ゑぼうしばかりをしいて、おきあがらんらんとし給へど、いとくるしげなり。

一、「やせさらほひ」とハ、ほねたかう、やせたる也。髡かぶ、さらほひとよむ。かしハ木やせたれど、しろうきよげにあてはかなると也。風流ふうりゆうとかきて、あてはかとよむ也。かしハ木、枕まくらそばたて、物の給ふけハひよハげなる也。

一、「いたうもそこなハれ給ハざりけり」とハ、ひさしうなやミ給ひしよりは、そこなハれ給ハぬと、心づよくつげんとて、夕ぎり、つねのかたちにかハリ給ハぬとの給ふ也。なみだをしのごひて、をくれさきだつへだてなくとこそちぎりつれとて、この御心ちハ、何事にておもり給しぞ、かくしたしき中に、おぼつかなくのミ侍るとの給ふに、かしハ木、心にハ、おもくなるけぢめもおぼえ侍らず。そこ所とくるしき事もなければ、たちまちにかくいのちきハまらんともおぼえぬに、月日へてよハリにけるに、いまハうつし心もうせたるやうなるとの給ふ也。「うしつ心」ハ、うつゝ心なきと也。へは

一、おしげなき身を、さまぐにひきとゞめらるゝいのり願ねがなどのちからにや、かゝづらひ侍るも中くくるしければ、いそぎたつ心ちし侍る。さるハ、このよのわかれざりがたき事ハ、おほうなん侍る。「おやにもつかうまつりさして」とハ、内府だいふの夫婦ふうふになげかれ奉るがゝなしきと也。「きミにかうまつる事もなかば」とハ、五十ごじゅう指仕さしつかへ、礼記らいき曰いは。かしハ木、廿五歳にじゅうごさいなれ、なかばのほどきミにつかへしとの給ふ也。「身をかへりみるかた」とハ、わが身をゝるかならじとかへりみる方も、ましてはかぐしからで、おやはらからのうらみとゞめつる、おほかたのなげきハさる物にて、又心のうちに思ひみだるゝ事あるを、いまハのきぎミにて、何かなにハもらすべきと思ひ侍れど、しのびがたき事を、たれにかハと思ひ侍る。これかれはらからあまた物すれど、さらにかさめ侍らんもあひなし。六条院ろくじょういんにいさゝかなる事のたがひめありて、月ごろ心のうちにかしこまり申事侍しを、ほいなう思ひなりて、やままひづきぬとおもひ侍しに、めしありて、院の御質ごしちの、楽所の心ミの日まいりて、御けしきごしきを給ハリしに、なをゆるさぬ御心ごこころばへあるさまに、御まじりごまじりを見たてまつりて、いとゞよにながらへんもはゞかりおほうおぼえなりて、あぢきなうおもふ給へしに、心さハぎそめて、かくしづまらずなりぬ

るとなん。人かずにもおぼしいれざりけめど、いはけなう侍し時より、たのミ申す心の侍しを、いかなる人のごうげんなどのありけるにかと、これなん此よのうれへにてのこり侍らんと給ふ。「ごうげん」ハ、讒言也。ことのつゝで侍らば、御みゝとゞめて、よろしうあきらめさせ給へ。なからんあとにも、此かうじゆるされたらん、御とくに侍るべきとの給ふまゝに、くるしげにみえまされば、夕ざり思ひあハする事もあれど、たしかにハえしもをしはからず、いかなる御心のおにゝか。さやうの御けしきも源氏ハなくて、かくおもへり給へるよしをも、きゝをどろきなげき申給ふめりしか。などいゝおほす事あるにてハ、いままでへだてのこひ給ひつらん。こなたかなたあきらめ申すべからん物をと、いまいふかひなしやとて、とりかへさまほしうかなしくおほさる。げにいさゝかひまありつるおりに、聞えうけ給ハるべうこそ侍けれ。されど、かうけふあすともやハと、ミづからながらしらぬいのちのほどを思ひのどめ侍けるも、はかなくなん。此事ハさらに心よりほかにもらし給ふまじ。さるべきつゝであらんおりに、御よういくハへ給へとて、きこえをくとかしハ木の給ふ也。又、「一条の宮に物し給ふ」とハ、女二のミヤ、ことにふれてとぶらひ給へ。心ぐるしきさまにて朱雀院などにもきこしめされんを、つくるひ給へなどの給ふ。いハまほしき事ハおほかるべきやうなれど、心ちのせんかたなくりにければ、いで給ひねと、てかき聞え給ふ。

一、かぢまいるそうどもちかうまいり、はゝうへ内府などもおハし給ふ。あつまれば、なくく夕ざりたちいで給ぬ。「女御をばさらにもいハず」とハ、こうきでんの女御をはじめ、くもゐのかりなども、いみじうなげき給ふ。かしハ木の心、あまねく人のこのかミ心に物し給ければ「右大臣とのきたかた」とハ、王かつらも、かしハ木のミぞ、むつまじき物に思ひ聞え給ければ、よろづになげき、御い

のりなどとりわきてせさせ給ける、「やむくすり」、引哥、われこそハミぬ人こふるやまひすれあふよりほかにやむくすりなし。「をんなミヤにも」とハ、おちばのミヤにも、つるにえたいめんしきこえ給ハで、あハのきえいるやうにてうせ給ぬ。引、世皆不牢固、如水沫泡焰。

一、としごろしたの心こそねんごろにふかうしもなかりしか、大かたにハ、女二のミヤをけしきあらまほしうもてなし給へば、おかしう打とけぬきさまにて過し給ければ、つらきふしもことになし。かしハ木、たゞかくみじかかゝりける御いのちにて、あやしくなべてのよすさまじくおもふ給ける、と女二の宮思ひいで給ふに、おほし入たるさま心ぐるし。ミヤす所も、人わらへにくちをしうなげき給ふ也。「おと」とハ、内府の夫婦、ましていはんかたなく、われこそさきだゝめ。よのことハりなくつらくかなしき事とこがれ給へど、かひなし。

一、「あまミヤは」とハ、女三のおほけなき心もうたてのミおほされて、よにながゝれと、かしハ木をおほさゞりしを、かくなるときゝ給ふハ、さすがにあハれなり。「わかぎミの御事」とハ、かほろの御事を、かしハ木わが子ならんと思ひたりしも、げにかゝるべきちざりにてや、思ひのほかの事もありけん、とおほしよるに、さまゝくに物心ほそうて、なかれ給ふ。三月になれば、空のけしきもうららかにて、かほろのいかのほどになり給て、いとしろううつくしう、「ほどよりハをよすげて、物が合たりなどし給ふ」とハ、かほろなにとなくさえつりなどし給ふ事也。

一、「おと」とハ、源氏、わたり給て、女三の宮のミ心ちハさやハかになり給にたりやとの給ふ也。「かひもなく」とハ、あまになり給たれば、みるかひなきと也。「心うくおほしすてにける」とハ、あまになり給たるハ、たゞわれをおほしすてたるにてこそと、かしハ

木に心かハし給しことを、した心にもたせて、源氏の給ふ也。曰ゝに源氏わたり給て、いましも女三の宮をかぎりかしづき給ふ也。

一、「御いかにもちいまいらせ給はん」とは、五十日の御いはるのもちいを、女三の宮にまいらせ給ふ也。「かたちことなるありさま」とハ、あまになれば、いかの御祝言いかゞなど、めのとたちいへる也。

一、「院わたり給て」とは、源氏わたらせ給て、なにか。女にてむまれ給はゞこそあらめ。おとこぎミうミ給へば、いかの祝言なにかいまゝしかる¹⁸べきと也。ひめぎミならバ、はゞ宮にあやかりて密¹⁹契心やおハせんと、源氏おほす也。「みなミおもてに、ちいさき」とハ、おましなどちいさくて、もちいまいらせ給へる也。「御めのとたち」とハ、女三の宮たち也。「御まへの物、いろゝ」とハ、女三の宮のおまへにまいるこ物ひ²⁰ハリごなど、いろゝをつくしたるを、ことの心ハしらずとりちらしたるを、源氏ハまばゆくわりなしとおほす也。「宮も」とハ、女三のミヤも、御ぐしのすゑのひろごりたるを、くるしとおほして、なでつけておハするに、木丁をひきやりて源氏る給へば、女三の宮はづかしてそむき給へる、いとゞちひさくほそり給て、御ぐしハおしミ聞えて、ながうそぎたれば、うしろハことにけぢめもみえ給はず。「すぎゝゝミゆるにびいろども」とハ、花だにくろミいりを、にび色と也。「すぎすぎ」ハ、したいをくれかきなりたるきぬのつまゝみえたる也。¹⁸

一、「きがちなるいま」黄いろさしたるくれなる也。「まだありつかぬ」とは、女三の宮のあますがた、ありつき給ハぬさま也。「かたハラめ」とハ、かたそばがほみ給ふ也。源氏の心也。

一、「うつくしき子ども」とハ、ちひさきあまそぎのをんな子の心ちして、女三の宮おさなくみえ給ふ也。

一、「すみぞめこそ」とハ、女三の宮のすみぞのきぬき給へるをみれば、めもくるゝやうになミだおつると源氏の給ふ也。「かやうにて

も」とは、あまになり給ても、見たてまつる事ハたゆまじきと、源氏思ひなぐさめ侍れど、「ふりがたふ」とハ、ふるくなりがたくあたらしき事のやうになげかるゝとの給ふ也。

一、「いとかうとしよりとて女三の宮より思ひすてられ奉るハ、わが身のとがと思なすも、さまゝむねいたきと、とりかへす物にも¹⁹がな、引哥、とりかへす物にもがなやよの中をありしながらのわが身とおもはん。女三の宮のあまになり給たるを、とりかへしたき心也。「いまハとておほしはなれんハ」とハ、夫婦²⁰のちぎりおほしはなれんハまことに女三の宮御心とわれをいとひすて給けると、はづかしう心うくおほゆべき、あハれとだにおほせと、源氏きこえ給へば、女三の宮、かゝるさまの人ハ、物のあはれもしらぬ物ときゝしを、ましてもとよりしらぬ事にて、いかゞきこゆべからんと給へば、源氏、かひなの事也。「おほししるかたもあらん物をとばかり」とハ、かしハ木のこととはあハれとおほすらんの心をの給ふ也。

一、「わかぎミを見たてまつり給ふ」とハ、かほるを、源氏見給ふ也。「御めのと」は、かほるのめのと、やんごとなき人あまたさぶらう也。めしいでゝ、つかうまつるべき心をきてなどの給ふ也。あハれのこりすくなきよにお¹⁹い出給ふべき人にこそと、みだきとり給へば、心やすくうちゑきて、つぶゝとこえて、いとうつくし。「大将などの」とハ、夕ぎりのちごおひの、ほのかにおほしいづるにもに給はず。「女御の御ミちはた」とハ、あかしばら、今上のみこたち、わうげづき給て、けだかき事こそあれ。ことにすぐれてもみえ給ハぬに、此かほるハ、いとあてに、あひぎやうづき、まミのかほりて、ゑがちなるなどを、いとあハれとみ給ふ。「まミのかほり」とハ、めづかひのよせいなり。「ゑがちなる」とハ、わらひがちなる也。

一、「思ひなしにや」とハ、かしハ木のおもかげに、いとうおほえた

る也。「まなこゑ」とハ、めの人ミののどかに、はづかしきさまもやうはなれて、かほりおかしきかほさまなり。「宮ハさしも」とハ、女三の宮ハ、かしは木をよくみ給ハざりしかバ、かほるをかしハ木にたるともおぼしわかざりける也。

一、「人はたしらぬ事なれば」とハ、かしは木の密契、人のしらぬ事なれば〔20〕「たゞひと所の」とハ、源氏の、御心のうちのミぞ、あハれにはかなかりける人のちぎりかな、とかしハ木のことを、おぼしいづる也。「けふハこといミすべき」とハ、いかのいはるなれば、いまくしきこといむべきとて、源氏なミだをレしとゞめ給ふ也。

「しづかに思ひて」、引、五十八翁方有後〔21〕。

静思堪〔22〕、歎亦嗟〔23〕、慎勿〔24〕、頑愚似〔25〕、汝父〔26〕。「五十八をととりすてたる」と、樂天ハ〔27〕。

五十八にてはじめて子をまうけて、此句をつくり給へバ、子ハ生遅と号す。をそくむまるレ也。源氏四十八にて、かほるまうけ給て、此句を吟〔28〕給へり。「なんぢがち〔29〕」に〔30〕とハ、かほる、かしハ木ににる事なかれと、いさめたきとの給ふ。かほる、かしハ木の密懐心に給ふなど也。「五十八をととりすてたる」ハ、四十八也。「すゑになりぬる」ハ、四十八なれば、よハひすゑになりてかなしきと源氏の給ふ也。

一、「此事の心しれる人」とハ、かしハ木密懐とりなし人、女房の中あらんかし、〔31〕たれとしらぬこそねたけれ、とおぼす。われをおこなりとみるらん、と源氏むねんにおぼす也。「わが御とがある事ハあへなん」とハ、あへてあかしからず、ふたついは〔32〕、女三の宮の御ためこそいとをしからんと也。「なに心なく物がたりして」とハ、かほる、なにとなくさえづりてわらひたまへるま〔33〕くちつきのうつくしきも、よくかしハ木にレ給たると也。

一、「おやたちの、子だにあれかし」とハ、内府の夫婦、かしハ木の子

だにあれかしとの給ふらんにも、かほるをみせず、かしハ木人しれぬかたミをとゞめをきて、さばかりおもひあがり、をよすげたる身を、うしなひたる事、とあハれなるに、めざましき心もひきかへし、源氏なき給ふ也。「人〔34〕すべりかくれたるほどに」とハ、女房たちおまへにすぐなきほどに、女三の宮の御もとにさしより給て、此かほるをいかゞみ給ふや。かゝる人をすてレ、そむきはて給ふべきにやありける、と源氏の給ふ。〔35〕たがよにかたねをまきしと人とハゞいかゞいはねのまつハこたへん。たが子ぞとかほるにとハゞ、いかゞかほるハこたへ給ふべきかと源氏の給ふ也。

一、「御いらへもなく」とは、女三のミヤ、かへしもよミ給ハぬ也。こ〔36〕とハりとおぼせば、しるてかへし給へとも給ハぬ也。

一、「物ふかう」とは、女三の宮、ふかき心ハおハしまさね、いかでかはづかしくおぼさ〔37〕らんとをしはかり給ふ也。

一、「大将のきミハ」とは、夕ぎりハ、かのかしハ木のほめかしいでたりしことを、いかなる事にかと、さばかりいひいでたりしに、よくけしきみるべきを、いふかひなくなりしとちめにて、あハれなりしおもかげわすれがたくて、しるてかなしとおほしけり。「女のミヤのよをそむき」とハ、女三の宮のあまになり給へるも、すかやかにおぼしたちけるも、又ゆるし給ふべき事ならぬをとおぼす也。「二条のうへの」とハ、む〔38〕らさきのうへの、なくく〔39〕の給ひしをだに、あまになしたてまつり給ハぬを、などふしんおほき事とおぼす也。

一、「むかしよりたえずミゆる」とハ、かしは木の心にあたえず女三の宮の御事を思ひし心、しのばぬおりく〔40〕ありきかし、もてしづめたるうハべは、かしは木よういあり、のどかに、心のうちに何事をおもふらんとミゆるまで貞心〔41〕にありしかど、なよび過たりし。げにかゝる事ありもやしつらんと、夕ぎりおぼさるレ也。「さるまじき事に心

をみだし」とハ、人づまなどに心をみだし、身をかへ給ふべきかハと、「人のためも」とハ、女三の宮の御ためにも、いとをしう物おもハせ奉り、わが身はた、いたづらにやハなすべき、むかしのちぎりといひながら、かるくしう、あぢきなき事なり、と夕ぎり心ひとつにおぼす也。「をんなぎみに」とハ、くもゐのかりにも、かしハ木のこといひいで給はず、つゐでなく、源氏にもいまだかしハ²²木のかたらひしさま申いで給ハぬ也。かゝる事をかしハ木かすたりしと申て、源氏の御けしきまほしかりけり。「ちゝおと」とハ、内府の夫婦ハ、おぼしづみて、御わざの法よく、なにくれのいそぎを、「きんだちの」とハ、かしハ木のきやうたち、とりくゝにぞし給ける。「きやうほとけ」とハ、七日くゝにくやうし給ふきやう也。「ほとけ」ハ、七日くゝの本尊也。

一、「右大弁」、かしハ木のおとうと也。「われなきかせせ」とハ、内府すぎやうなどの事、われになきかせせ、思ひまどひ侍るに、中くかしは木のよみぢのさハリならん、と内府の給ふ也。

一、「二条の宮にハ」とハ、女二の宮ハ、ましておぼつかなくてわかれ給にしうらみさへそひて、日ごろふるまゝに、宮のうち、人げすくなう心ほそげにて、したしくかしハ木のつかひならし給し人ハ、なをまいりてつかうまつりなどするもある也。かしハ木のこの給ひし²²むま・たかなど、「そのかたのあづかりども」とハ、たかもはなち給たれば、たかがひもつく所なうて思ひくつして、かすかに時ゝいでいりする也。「つく所なう」とハ、とりつくべきわざなき也。「いでいるをミ給ふ」と、まれくゝいでいる人かげを、女二の宮み給ふ也。かしハ木の「もてつかひ給し御てうどゞも」とハ、もてあそび物也。つねにひき給しびわ、わごんなども、をゝとりはなちやつされて、むもれいたきわざなり。「むもれいたき」とハ、うづもれたるが心いたましき也。「さぶらう人ゝも、にびいろに」とハ、女ばうた

ちも、ぶくゑをきたる也。

一、「さき花やかに」とハ、くるまのさきをふ也。「あハれ、ことのゝ」とハ、かしは木の、くるまのさきをひておハせしけハひ、思ひいでゝ、なくもある也。「大将どの」とハ、夕ぎり、おハしましたる也。「御せうこきえいれ」とハ、夕ぎりおハしたるよいひいれ給へる也。「れいの宰相のきミ」とハ、²³かしハ木の御おとうと也。「いとほづかしげなる」とハ、夕ぎりのもてなしごとみにみえて入給へり。をしなべての、女房たちのあへしらはんも、いかゞとて、御息所たいめんし給ふ也。「いみじきことをおもふ」とハ、かしハ木のわかれをなげく事ハ、おやはらからのなげにもこえて侍れども、きこえやるべきかたなくて、よのつねの事のやうになり侍るとの給ふ。かしハ木、いまハのほどにも、の給ひをく事侍しかば、をろかならず、女二の宮の御事を思たてまつる。たれもさだめなきよは思ひのどめがたけれど、をくれさきばかりのほどにてこそ侍れ、との給て、思ひをよばんにしたがひて、かしハ木のゆいごんまゝ心ざしをも御らんぜさせんと思ふ給ふる、と夕ぎりの給ふ也。

一、「かんわざなどしげき」とハ、二月ハ御神事しげく、きんちうにはおハしませ、さやうのはゝかりにふりはへ、御とぶらひにもまうで²³ざりしことなどの給ふ也。「たちながら」ハ、中くゝにおもふ給へてなどの給ふ也。

一、「おとゞなどの」とハ、内府の、かしハ木のわかれをなげき給ふを、おもひ侍るにつけても、女二の宮の御なげきのふかさをしはかりきこえさするに、いとつきせずこそとて、なみだしばくをしのごひ給ふ也。

一、「つねなきよのさが」とハ、かしハ木のあハれハ、よのさがと、たぐひなき事にもあらずと、としつもりたる人ハ、思ひさまし侍るを、女二の宮のおぼし入たるさまの、いとゆゝしきまで、しバしもをく

れ給ふまじきやうに侍れば、心うかりける身の、ながらへて、かくかた／＼にはかなきよのすゑのありさまを見給へすぐすべきにてやと、しづ心なくとの給ふ也。

一、をのづから夕ぎり、きゝをよばせ給ふやうもあらん。はじめつきたより、長／＼かしハ木に女二の宮ゆるし給ふ事を、われハうけひき侍らざりし御事を、内府のあながちに御心ざしの心ぐるしう、朱雀院にも^{あま}よろしきやうにおぼしゆるしつれば、さてハミづからの心をきてのをよばぬなりけりと、思なしてみ奉りしを、かくゆめのやうになり給へば、はかなきミづからの心のほど、おなじうハつようあらがひ侍らましをと思ひ侍るに、くやしう侍るとの御息所の給ふ也。「つようあらがひ」とは、いやと申べき物をの心也。「それもかやうにしも」とハ、かしハ木のいのちみじかゝらんとおもひてハ申さぬ、と御息所の給ひなをす也。たゞみこたちハ、おぼろげの事ならで、かやうによづき給ふ事は、心にくからぬ事と、わがふるめき心にハ思侍し、と御息所の給ふ也。「よづき」とハ、おとこもち給ふハ心にくからぬと也。「いづかたにもよらず」とハ、女二の宮、かしハ木にもそひはて給はず、中ぞらになり給たると也。

一、かゝるつるでにも、けぶりまぎれ給なんハ、此御身のためにハ、人ぎゝもくちをしかるまじけれと、おもひ侍れど、さりとても、しかすく^{あま}よかに、「えおもひしづむまじきことに」とハ、人めよからんとてわが子をなくなり給へとハさらにおもハぬと御息所の給へる也。

一、「いとうれしう」とハ、夕ぎり、あさからぬ御とぶらひの、たび／＼になり侍るを、ありがたふもと思ひ侍るを、さてハかしハ木の御ちぎりありけるにこそと、御息所の給ふ也。「おもふやうにしもみえざりし」とハ、かしハ木おもふやうに女二の宮をかしづきおぼさざりつれども、いまハのきざミ御おとうとたちいひつけをき給へりし御

ゆいごんの、あハれなるになん、うきにもうれしきせハまじりけりとて、いといたうなき給ふ也。引哥、うれしきもうきもなミだハひとつにてわかれぬ物ハ心なりけり。

一、大将もとみにえたためらひ給ハぬと、夕ぎりもにわかになみだをためらひ給はず。「あやしう、こよなくをよすげ給へりし人の」とハ、かしハ木、おとなしたてし給しかバ、此二三年のこなた、いたうしめりて、^{あま}物心ほそげにみえ給しかバ、よのことハリしり、物ふかうなりぬる人の心すミすぎたるハ、心うつくしからず、あざやかなるかたのおぼえ、うすらぐ物なりとなん、つねにいさめ聞えしかバ、かしハ木、心あさきやうにおもハれし、と夕ぎりの給ふ也。「人にまさりて」とハ、女二の宮、人よりもかしハ木のわかれなげき給ふらんこそ、かたじけなければ、心ぐるしけれ、と夕ぎりの給ふ也。やゝほどへてぞいで給ふ。「をよすげて」とハ、おとなしめきての心也。

一、「かのきミハ五六年」とハ、かしハ木ぞ五つ六つばかり夕ぎりにまし給たりし也。されどなまめきて、あひだれてぞみえしと也。「あひだれて」とハ、あい／＼しきすきたハふれてぞかしハ木ハみえしと也。

一、「これハすくよかに」とは、夕ぎりハすくやかにおゝしきけハひして、かほハかしハ木よりハわかしくおハする也。「おゝしき」、おとこ／＼しき也。^{あま}

一、「物がなしさもわすれて」とハ、わかき人々ハ、かしハ木のあハれハわすれて、夕ぎりをめであへる也。「ことしばかりハ」、引、深草の野べのさくらし心あらばことしばかりハすミぞめにさけ。「いま／＼しきすぢ」とハ、此哥ハ、哀傷の哥なれば、あひんんことはと^{ぎん}吟じなをし給ふ。引哥、としごととに花のさかりはありなめどあひんんことはいのち也けり。

一、「時しあればかハラぬ色にほひけりかたえかれにしやどのさくらも」「わざとならずしてたち給ふ也。ずしハ、吟じ也。ミやす所よミ給ふ。

一、「この春はやなぎのめにぞ玉ハぬくさきちる花のゆくゑしらねば」「御息所わがめにぞなみだの玉はぬくかしハ木の行ゑしらねばと也。

一、「ふかきよしにハ」とは、御息所ふかきなさけハなき人なれど、かどありてきこえし人なれば、げにめやすしと夕ぎりミ給ふ也。

一、「やがてちじの大との」とハ、内府に、夕ぎりまいり給へれば、きんだちあ（26）またおハして、こなたへいらせ給へとあれば、おとゞの御いでるのかたに入給へり。内府のいで、いつもる給へるおまし所也。

一、「ためらひて」とハ、かなしき心ちたすけてたいめんし給へる也。
 一、「ふりがたふ」とハ、としふりがたく、わかやかにおハせし御かたち、をとろへ給て、ひげなどもおひしげり給たる也。「おやの御けう」とハ、けうやうよりも、かしハ木のなげきふかきと也。内府おやのけうやうをろかなりし人、「見奉り給ふより」とは、夕ぎりの内府ミ給ふより、しのびがたくおほさるゝ也。夕ぎり、あまりおつるなみだもはしたなしと、もてかくし給ふ也。「おとゞも」とハ、内府も、夕ぎりとかしは木中よくおハせしとを見給ふに、たゞふりにふりおつるなみだ、とゞめ給はず。

一、一条の宮まうでたりつるありさまかたり給ふに、春雨かとミゆるまで、引哥、雨やまぬ軒（のき）の玉水（たまづ）かずしらず恋しきことのまさるころかな。（26）

一、「たゝんがミに」とハ、たゝうがミに、夕ぎりかき給へる、やなぎのめにとあるうたを、内府にたてまつり給へば、めをしほりあけてみ給ふ。ほこりかなりし内府の御けしき、なごりなく人わろし。此

玉ハぬくとあるふしの、げにとおほすに、ひさしうなみだためらひ給はず。「きミの御は」とハ、あふひのうへ、かくれ給しあき、よにかなしき事のきハにはおぼえ侍しを、女ハみる人すくなう、とある事かゝる事も、あらハならねば、かなしびもかくろへてありける。かしハ木ハ、はかしくしからねど、おほやけもすて給はず、つかさくらむにつけてたのむ人々、つきくにおほうなりて、くちをしがるも、るいにふれてあまたあり。かうふかきおもひハ、そのおぼえも、つかさくらむもおもはず、たゞことなる事なかりしかしは木のありさまのミこそ、たへがたく恋しかりけれ。なにはかりの事にてかハ、思ひさますべからんと、空（そら）をあふぎてながめ給ふ。「夕ぐれ（ゆぐれ）のそら、にび色にかすみて」とハ、服衣（はくえ）の色にて、かなしきと也。

一、「木の下のしづくにぬれてさかさまにかすミの衣（ころも）きたる春かな」と内府よミ給へる也。大将のきミ、

一、「なき人もおもハざりけんうちすてゝ夕のかすミききたれとハ」
 一、弁（ひら）のきミ、「うらめしやかすミの衣たれきよと春よりさきに花のちりけん」。内府の「このものしづくにぬれて」とハ、かしハ木にきすべきぶくえを、わがさかさまにきたると也。夕ぎりの「なき人もおもハざりけん」ハ、かしハ木もわがさきだちて内府に服（はく）させたてまつらんとハおもハざりけん。よの中さだめなきならひと也。
 右大弁の「かすミの衣たれきよ」とて、かしハ木さきだち給たるぞとよるもよの中さだめなきがうらめしきと也。春を内府にあて、花を柏木（かし）に也。

一、「みさ」とハ、のちのとぶらひ、いかめしうし給ひたる也。（みさ）

一、「大将殿（だいしやうどの）のきたのかた」とハ、くもあのかりをば、さる物にて、夕ぎりことに、みずきやう哀にし給へる也。「ミずきやう」ハ、佛布（ぶつふ）施也。

一、「一条の宮にも」とハ、女二の宮をも、つねにとぶらひ給ふ也。

一、「空ハ、心ちよげなる」とハ、四月ハ清和の天とて天地やハラギあへる也。

一、「ひとつ色なる」とハ、草木ひとつにしげりあひたる也。

一、「物おもふやど」とハ、かしハ木の旧跡よろづにつけて心ほそくおぼさるゝ也。

一、「れいのわたり給へり」とハ、夕ぎり、一条の宮にまいり給へる也。「庭もあをミ」とは、あれて草むらとやうくゝなれる也。「うすき物のかくれ」とは、すいがひのうち、草しげくなる也。「一むらすゝ

き」引哥、夕だちの一むらすゝき露おちてむしのねそはんあき風ぞふく。「露けて」とハ、なみだもよほされて、夕ぎりわけ入給へる也。「にび色の木丁の衣がへしたる」とハ、木丁のかたびらも、四月より衣がへする也。あをやかに衣がへすべき姿を、にびいろなる

ハ、ぶくなれば也。にばめるかぎミも、服衣也。「めをどろかるゝ」と、服衣かなしきと也。けふハすのこに夕ぎり給へば、しとねさしいでたる也。御息所に、夕ぎりおハしましたるよし申けれど、な

やましとてふし給へるほどなると也。とかく女房たちいひまぎらハすに、夕ぎりハ、おまへの木だちを、うちながめてる給ふ也。「物よ

りことなる」とハ、万物ににすぐれて、かしは木とかえで、おもしろくえださしかハしたるを、見給て、いかなるちぎりに、枝さしか

ハしあへるぞ、と夕ぎりの給てよめる。

一、「ことならばならしのえだにならさなんはもりのかミのゆるしありきと」、庭のこだちのごとくならば、われを女二の宮ならし給へ。

かしは木のゆるしありしぞ、と夕ぎりの給へる也。ゑもんのかミを、かしハ木といへるハ、まもりのかミとゑもんのかミをいふ也。はも

りのかミとて、かしハ木にハ神まします也。はもりのかミとまもりのかミとハ、はとまと一いんなれば也。「みすのとのへだて」とは、

②③ 女二の宮、みすへだてゝおハしますこそつられれと也。「なよ

ひすがた」とハ、夕ぎりのやハラかななるもてなしを、女ばうたちめであへる也。少将のきミといふ人して、女二のミや御返し、

一、「かしハ木にはもりのかミハまさずとも人ならずべきやどのしづえか」、うちつけなる御ことのはになん、御かへしの心ハ、かしハ木

なくなり給たるとて、わが身に人をならずべきことならず、女二の宮の給ふ也。引哥、かしは木にはもりのかミのましけるをしらでぞ

おりしたゝりなさるな。「やどのしづえぞ」とハ、女二の宮下の御ことば也。

一、「げにとおぼす」とハ、夕ぎりげにうちつけなることゝおぼす也。一、うきよの中をとかしハ木の哀傷を思ひしづむ月日にそへて、なや

ましくなりて侍る、と宮す所の給ふ也。かくたびゝ御とぶらひのかたじけなきに、思ひおこしてこそとの給ふ也。②④

一、「おもほしなげく」とハ、かしは木の哀傷なげかせ給ふハ、ことハひなれど、又さのミハいかゞ侍らん。よろづの事かくこそあるなら

ぎりあるわかれのミこそかなしけれたれものちを空にしらねば。一、「この宮こそ」とハ、女二の宮ハ、きゝしよりも心のおく見え給ひ

けれ、と夕ぎりおぼす也。いかにかしハ木にをくれて人わらハれにおぼすらんと也。「心とめて」とハ、女二の宮の御事を、宮す所に

夕ぎりくハしくとひ給ふ也。

一、「かたちぞまほに」とハ、みめハよくおハせしと夕ぎりおぼせど、

見ぐるしきほどだになくハとおぼす也。「みるめにより」とハ、かたちあしきとて、人おもひあき、又かたちよきとて、さるまじき人に

心をまどハすべきにあらず、とかしハ木の女三の宮にいのちをかへたるもかるゝしき事、と夕ぎりおぼししられ給ふ也。「たゞ心ばせ

とおぼす也。「むかしにならずらへて」とハ、かしは木におほしなずらへて、したしくおぼされよ、と宮す所にの給ふ也。「なずらへて」ハ、よそへて也。

一、「けさうだちて」とハ、女二の宮に心かけ奉るやうにハなくて、ねんごろに申給ふ也。「なをしすがた」とハ、夕ぎりのすがた、「ただち」とハ、たけも物くしくそごろかにみえ給ける也。「そごろか」とハ、かどくしく也。「かのおとゞ」とハ、源氏、なつかしうなまめきて、あてなることのならびなきと也。「なまめき」とハ、うつくしきかたち也。「あてなる」ハ、けだかきすがた也。「これハおゝしく」とハ、夕ぎりハおとくしくしく、花やかにみえ給ふ、と人々さゝめきいふ也。「おなじう」とは、女二の宮にちぎり給て、かやうにいで入もし給へかし、と人々おもふ也。

一、「いしやうぐんがつかに」とハ、引、天与ニ善人一、吾不レ信。

右将軍墓草初秋。ゑもんのかみもきんこしやうぐんといへば、此句をゑもんのかみによせて夕ぎりの給ふ也。くさあきなりといへる。「あをし」とハ、かたハらの草をミての給ふ也。《30オ》みぎの句ハ、時平のおとゞの御子、保忠大將うせ給たる時つくれる也。「ちかとをう」とハ、とをうハ、やすたゞのこと、ちかき、かしハ木のこと也。「心みだる」とハ、此ふたつのかなしび、たかきもくだれるも、おしミあたらしがらぬハなき也。「むべくしきかた」とは、藝能又実なる事ハいふにをよはず、あやしうなきけをかしは木たてたる人なりしかば、さもあるまじきおほやけ人、女房などのとしふるき人なども、おりしごとくに、恋しかなしまぬハなきと也。

一、「うへにハ」とハ、今上ハ、御あそびなどのおりごとに、まづおほしいで、しのばせ給ける也。あハれ、ゑもんのかみといふことぐさ、なに事につけてもいはぬ人なし。「六条院にハ」とは、源氏ハ、ましてあハれとおほしいづる事、月日にそへておほかり。「このわか

ぎミを」とハ、御心ひとつにかほるを、かしハ木のかたみと見なし給へど、おもひよる人も《30オ》なきことなれば、かひなし。あきつかたになれば、此かほるはひゑざりなどし給ふと也。《31オ》